

4カ月以上に及ぶ避難生活 「鱒淵の心」でもおてもなし

避難者が鱒淵の道路をマスク姿で何もすることなくブラブラと歩く姿は、はたから見ると異様な雰囲気です。それは日増しに増えていきました。「動かないと足腰が駄目になるからね」との散歩でした。

そのような中、地域の人たちが「声掛けとあいさつ」運動の奨励に努めたのも鱒淵の心のもてなしでした。畑、田んぼで出会った時の朝夕のあいさつと「大変でしたね」との思いやりの一言は、地域住民と避難者の絆を一層強めることとなり、気やすく話し合う雰囲気づくりにもなりました。

「ホタル会館（及甚と源氏ボタル交流館）前の農園は復興支援農園として活用してください」と中瀬区長に話しました。季節は春野菜の種まきと植えつけ時期。身体を動かして収穫の喜びにつなげようと活動に入るようになりました。種や苗がないので奔走し、多くの協力をいただきました。作付品目はジャガイモ、ナス、トマト、ピーマン、ネギ、枝豆でした。

「仮設住宅ができて帰る時には、お土産に持って行きましょう」との合言葉で農作業にも精が出ていたようです。共同作業は災害を忘れる時間でもあったことと思います。

この農園活動は避難者のふれあい交流の場となり、交流の場となり、方々との話し合い、交流の場となり、夜のみーティング時に鱒淵の情報を提供し、避難者のお世話をさせていただきました。「ニュー鱒淵ふるさとだより」も発行し、交流情報を伝え合いました。行政職員や地域から選出された支援員の避難者に対する心遣いや援助は、皆に感謝されていました。芸能人や各方面からの慰問訪問も多くありました。地域の人も声がかかり、一緒に参加させていただいたことも有意義なつながり「絆」となりました。

地域の祭りにも案内を出し、積極的に参加していただきました。4月の春季鱒淵華足寺大祭には、避難された方からも踊りやカラオケの参加がありました。祭りが癒やしの場にもなったのではないのでしょうか。この華足寺に鱒淵小学校に避難された方々の名前を書いた復興祈願の掲額をして、この惨事の教訓と明日への復興の記録として、後世への道しるべとしました。

「みやぎ鎮魂の日」に一斉黙祷を実施

「みやぎ鎮魂の日」を定める条例が平成25年4月1日に施行されました。本年3月11日に初めての「みやぎ鎮魂の日」を迎えます。本市でも震災発生時刻の3月11日、午後2時46分に防災行政無線のサイレン吹鳴を合図に一斉黙祷を捧げます。東日本大震災で亡くなられた方々を追悼し、震災の記憶を風化させることなく後世に伝えていくために実施するものです。市民皆さまのご理解とご協力をお願いいたします。

【実施日時】「みやぎ鎮魂の日」3月11日(火)午後2時46分
【内容】サイレンを合図に一斉黙祷を実施



▲震災発生時刻に合わせ、防災行政無線のサイレンを鳴らします

流と、心の健康づくりにもなったようです。朝の散歩は、学校からこの場所までの約1.5キロで、ちょうどよい散歩コース。野菜を自分たちが作るのと力への入れようも違います。毎日、朝夕に作物の生育状況を見ながら歩くことは、励みにもなったようです。

そして、仮設住宅が完成。4カ月間の避難生活を終えて、8月3日にはいよいよ「お別れ会」が開かれることになりました。県道には「サヨナラ、南三陸の復興を」、学校にも「絆を大切に」という看板が設置されました。地域住民のアイデアです。大勢の地域住民の方々が参加して別れを惜しみ、一日も早い復興を励ます会にもなりました。

ホタルの神秘的な光に 亡き人の魂重ねる

中瀬地区は地区全体で避難してきたので、区長を中心にとまりがありました。毎日、朝夕に開かれる班長会議ミーティングでの情報の共有は、地区の力だと感じました。校舎隣の体育館に設置されたRQボランティアの東北本部の方々の支援と交流も大きな力になりました。

わが家は、ホタル会館の近くにありますが。「自分に何が出来るか？」でできることをやろう」と、自宅の長屋を開放し「南三陸サロン」と名付け、休憩場所として提供しました。夜には、そこが避難者とボランティア、地域の

鱒淵は毎年6月末には国の天然記念物の源氏ホタルが飛翔し、観光客でにぎわいます。震災のあった年も地域とボランティアが協力し、ほたる祭りが行われました。

夜になると、避難された方々は、夕食もほとんど毎晩ホタル観賞に行く人が多くいました。あの暗闇で光る淡い神秘的な光が、震災で亡くなった魂に見えたという方もいて、心を打たれました。ホタルは光り輝き、生きることの大切さも教えていたようでした。南三陸町復興の明日への光として、キラリと光っていました。

避難者とボランティアで 「鱒淵ふるさと会」を結成

あれから、3年近くが過ぎようとしている今、南三陸町から避難された方々との交流は、強い絆として続いていることは意義深いものです。新しい地域づくりは風土づくりとも言われ、多くのふれあい交流から生まれます。

応援協定の支援 さらなる連携強化

東日本大震災では、友好姉妹都市協定や災害時応援協定を締結していた他自治体、企業などから食糧や支援物資を優先かつ迅速に提供を受け、災害情報発信などの協力を得ることができました。これは、災害時応援協定の有益性が十分に実証されたと言えます。しかし、当時の課題として互いの連絡体制が整っておらず、応援内容の伝達が滞る状況も発生しました。市は、平成25年9月までに67団体との災害時応援協定を締結しています。今後の災害に備えて各団体と情報交換会や会議を重ね、相互の連絡体制の強化を図っていく計画です。

大震災に係る災害応援活動に関する協定



▲災害時応援協定の連携を一層強化



東和・鱒淵地区と南三陸町・中瀬行政区との交流は、避難住民が仮設住宅に移った後も続いています

避難された方とボランティア、そして地域の人々との交流は続いています。避難された方との関係で特筆すべきは、何と言ってもRQボランティアです。鱒淵に24カ国から約4万5千人が来て活動したことが、避難者、地域、ボランティアによる新しい地域、風土づくりの原型につながっていくことを期待しています。

避難者とボランティアなどで、「ニュー鱒淵ふるさと会」も発足しました。この会は、鱒淵を好きな人を中心にしたふるさと運動活動団体です。気張らずに情報交換し、今後はイベントも計画しています。地域のお祭り「華足寺大祭」への招待はその後毎年行われ、復興祈願と同時に御膳あげ行事や演芸への協力も一緒に行う仲となりました。ホタルの季節にも招待し、一緒にホタル見学と話し合い交流が行われてい

あの震災を 特集 忘れない